月刊

JMITUディスカ

新型コロナ対応版

5月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2022 年発行

No,449

私たち労働組合は、2022年春闘・夏季一時金妥結しました。

会社からの回答

セガ

Ⅰ．賃金引き上げ

１．一般正社員（Lp 格以下）の昇給

(1)賃金引上げ額

基本給昇給分（令和４年度基本給テーブル（別表１）、ステージポイント対応テーブル（別表２）による）

基本給個人評価額　＝　5,798 円（平均）

Ⅱ．夏季一時金

１．一般正社員（Lp 格以下）

(1)評価期間在籍６カ月以上の一般正社員に対し、資格別賞与固定額に家族手当を加算した額に対し係数３．０を基準とした賞与額（一人平均 1,078,751 円）を次のとおり、支給する。

支給額＝［資格別基準額（別表３）＋家族手当］×３．０＋人事評価額－勤怠評価額

人事評価額＝ 評価ポイント単価 × 個人評価ポイント（別表４）

評価ポイント単価は、原則として本部・事業部別に設定した賞与原資額を、本部・事業部の人員の個人評価ポイントの総計で割ることにより算出する。

支給日　　令和４年６月１７日（金）予定

令和４年度給与テーブル表

別表１．基本給テーブル

※別表２の評価（ R7 ～ R1 ）に応じたポイントの累積で「ステージ」が上下し昇降給が発生する。

ステージ	Gp	Lp	ポイント
14	290,000	-	260~280
13	280,500	-	240~255
12	271,000	-	220~235
11	261,400	-	200~215
10	251,700	-	180~195
9	242,000	-	160~175
8	237,000	417,400	140~155
7	232,000	399,200	120~135
6	227,000	381,000	100~115
5	222,000	362,800	80~95
4	217,500	344,600	60~75
3	213,000	326,400	40~55
2	208,500	308,200	20~35
1	204,000	290,000	0~15

別表２．ステージポイント対応テーブル

※R8, R9 の評価は、今期適正化評価時のみ使用可能

Lp									
	R9	R8	R7	R6	R5	R4	R3	R2	R1
8	60	40	20	15	10	0	-5	-20	-30
7	60	40	20	15	10	0	-5	-20	-30
6	60	40	20	15	10	0	-5	-20	-30
5	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
4	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
3	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
2	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
1	60	60	40	20	15	10	5	0	0

Gp									
	R9	R8	R7	R6	R5	R4	R3	R2	R1
14	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
13	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
12	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
11	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
10	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
9	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
8	60	60	60	40	30	20	10	0	-20
7	80	80	60	40	30	20	10	0	-20
6	80	80	60	40	30	20	10	0	-20
5	100	80	60	40	30	20	10	0	-20
4	100	80	60	40	30	20	10	0	-20
3	120	80	60	40	30	20	10	0	-20
2	120	80	60	40	30	20	10	0	-20
1	120	80	60	40	30	20	10	0	-20

別表３．賞与資格別基準額

等級	ステージ	基準額
Lp	6-8	220,000
	4-5	210,000
	1-3	200,000
Gp	12-14	160,000
	9-11	150,000
	1-8	140,000

別表４．賞与評価ポイント

等級	ステージ	S	A+	A	B+	B	B-	C
Lp	6-8	247	221	196	**170**	145	119	94
	4-5	225	202	178	**155**	132	109	85
	1-3	203	182	161	**140**	119	98	77
Gp	12-14	174	156	138	**120**	102	84	66
	9-11	160	143	127	**110**	94	77	61
	1-8	145	130	115	**100**	85	70	55

SLS

Ⅰ．賃金引き上げ

１．一般正社員（ＭＳ格以下）の昇給

（１）賃金引上げ額

イ）本給昇給分（２０２２年度本給テーブル（別表１）による）

２０２２年４月１日現在の年齢額　－　前年の年齢額　＝　758 円（平均）

ロ）評価給昇給分（２０２２年度評価給昇給テーブル（別表２）による）

評価給個人評価額（平均は１）　＝　2,761 円（平均）

ハ）調整給昇給分　＝　500 円（一律）

ニ）昇給額合計（イ＋ロ＋ハ）　＝　4,019 円（平均）

Ⅱ．夏季一時金

１．一般正社員（ＭＳ格以下）

（１）評価期間在籍６カ月以上の一般正社員に対し、資格別賞与固定額に家族手当を加算した額に対し係数２.０を基準とした賞与額（一人平均 726,554 円）を次のとおり、支給する。

支給額＝［資格別基準額（別表３）＋家族手当］×２.０＋人事評価額－勤怠評価額

（イ）上式中の「人事評価」による金額は次の方法で算出する。

人事評価額＝ 評価ポイント単価 × 個人評価ポイント（別表４）

評価ポイント単価は、原則として全社で設定した賞与原資額を、全社の人員の個人評価ポイントの総計で割ることにより算出する。

支給日　　令和４年６月１７日（金）予定

別表　2022年度給与テーブル表

＜別表1　本給テーブル＞

（単位：円）

年齢	新本給	差額
18	95,730	650
19	96,380	650
20	97,030	650
21	97,680	650
22	98,330	650
23	98,980	650
24	99,630	650
25	100,280	650
26	100,930	650
27	101,580	1,000
28	102,580	1,000
29	103,580	1,000
30	104,580	1,000
31	105,580	1,250
32	106,830	1,250
33	108,080	1,250
34	109,330	1,250
35	110,580	1,150
36	111,730	1,150
37	112,880	1,150
38	114,030	1,150
39	115,180	1,150
40	116,330	1,150
41	117,480	1,050
42	118,530	1,050
43	119,580	1,050
44	120,630	1,050
45	121,680	800
46	122,480	800
47	123,280	800
48	124,080	800
49	124,880	800
50	125,680	400
51	126,080	400
52	126,480	400
53	126,880	400
54	127,280	400
55	127,680	0
56	127,680	0
57	127,680	0
58	127,680	0
59	127,680	0

＜別表2　評価給昇給テーブル＞

（単位：円）

資格	ﾚﾝｼﾞ内位置	評価 5	評価 4	評価 3	評価 2	評価 1	評価 0	評価 −1
MS2	2/3～上限	20,000 ～ 17,000	14,000	11,000	8,000	5,000	0	−6,000
	1/3～2/3	20,500 ～ 17,500	14,500	11,500	8,500	5,500	0	−5,500
	下限～1/3	21,000 ～ 18,000	15,000	12,000	9,000	6,000	0	−5,000
MS1	2/3～上限	14,000 ～ 12,000	10,000	8,000	6,000	4,000	0	−5,000
	1/3～2/3	14,500 ～ 12,500	10,500	8,500	6,500	4,500	0	−4,500
	下限～1/3	15,000 ～ 13,000	11,000	9,000	7,000	5,000	0	−4,000
A2	2/3～上限	10,000 ～ 8,600	7,200	5,800	4,400	3,000	0	−4,000
	1/3～2/3	10,500 ～ 9,100	7,700	6,300	4,900	3,500	0	−3,500
	下限～1/3	11,000 ～ 9,600	8,200	6,800	5,400	4,000	0	−3,000
A1	2/3～上限	7,000 ～ 6,200	5,400	4,600	3,800	3,000	0	−3,000
	1/3～2/3	7,000 ～ 6,200	5,400	4,600	3,800	3,000	0	−3,000
	下限～1/3	7,000 ～ 6,200	5,400	4,600	3,800	3,000	0	−3,000

＜別表3　賞与資格別基準額＞

（単位：円）

資格	基準額
MS2	220,000
MS1	200,000
A2	160,000
A1	140,000

＜別表4　賞与評価ポイント＞

評点 / 資格	96以上	95～86	85～71	70～61	60～46	45～36	35以下	1評価内格差
	4	3	2	1	0	−1	−2	
MS2	260	230	200	170	140	110	80	30
MS1	215	190	165	140	115	90	65	25
A2	180	160	140	120	100	80	60	20
A1	160	140	120	100	80	60	40	20

掌編小説

夢か現か

仙洞田一彦

この頃、永富は長く生き過ぎたかなと思うようになっていた。永遠の永に、富などと縁起の良さそうな苗字だが、年金とわずかなたくわえで食っている、かつかつの生活だった。腕も痛いし、足も痛い。医者に行くほどではないのが救いか。あと数年で八十になるから、手足の痛みは歳のせいだと思って半ばあきらめていた。我慢できるくらいの痛さだから呑気なことを言っていられるかも知れないとは思っている。一方、痛みが進行しても今を受け入れる覚悟を固めようとも思っている。

以前は自炊をしていたが、それも面倒臭くなり、朝はパンとコーヒー、昼と夜はスーパーかコンビニの弁当で間に合わせていた。

家にいるときは、といっても足に痛みを感じるようになってからは、散歩の時間も少なくなって、ほとんど家にいた。だから、見ていても、見ていなくてもテレビはつけっぱなしだった。六畳一間のアパート暮らしで、服はトレーナーの着た切り雀。

半世紀も前に入ったアパートでずっと暮らしている。いくらか恩に着せるようの口ぶりで大家が「アパートができたときから住んでいる永富さんじゃ、家賃も上げられない」と言う。どんな言われ方をしようが、家賃が上がらないのが何よりだ。本当は建物が古くなったんだから下げてもらいたいが、大家を変に刺激しない方がいいかもしれない。もともと争いを好まないというか、避けたい性格だから。このまま静かにあの世に行かせてほしい。

そう思っていたが、ここにきて周辺がにわかに騒がしくなってきた。新型コロナウイルス騒ぎだ。それがおさまらないうちに今度はウクライナ戦争だ。

そんな環境の変化のせいか、歳のせいか、永富は時間や場所の感覚がおかしくなってきたようだ。自分で、自分がおかしいと分かる時もあるようだ。

永富の隣りの部屋は、永富と同じくらいの年頃の男が、やはり一人暮らしをしていた。千鳥という、ちょっとしゃれた感じの苗字だった。このアパートに来たのは永富より後だったが、それでもかなり経つ。千鳥は永富とは違い長身で髪もふさふさしていて、目立つ男だった。

永富、千鳥、どちらもお喋りではないが、時によっては廊下で長話をするときもあったから、気が合わないわけではなかった。千鳥という苗字から千鳥足を連想し、酒が行けそうな名前だったが、まったく飲めないようだった。

一週間ぶりくらいに陽の当たる五月の日だった。昼近く、永富はアパート近くの公園のベンチに腰掛けていた。若者ならTシャツ一枚の陽気だが、永富は長そでシャツに薄い上着を羽織っていた。すると千

鳥が缶コーヒーを片手に寄って来て、缶を持っている手で永富の隣りを指した。
「どうぞ、どうぞ」
永富が答える前に千鳥は隣に腰掛けた。
平日の昼だから公園に子供の姿はなかった。かわりに背広姿や、作業衣姿の何をするふうでもなく、そこここのベンチに腰掛けていた。何かするには短い時間なのだろう。ぼさっとくつろいでいる。
千鳥は缶コーヒーを一口飲むと言った。
「いよいよですな」
「え、なにがです」
「ドンパチ、ドンパチですよ」
勢い良く言った千鳥が迷彩柄のシャツを着ていることに、永富は気づいた。いい年をして何をはしゃいでいるのかと、永富は千鳥を見て思った。しかし、せっかくの日和、皮肉を言っても、反論しても、ましてや絡んで後を引いてもつまらない。
永富はウクライナ侵略の惨禍報道ばかりで食傷気味になっていたが、千鳥の方は同じ画面を見ていても、老化して血の巡りが悪くなった体に興奮剤でも注射されたようになっている。刺激の強い画面をこれでもか、これでもかと見せつけられれば、麻痺してくる。嫌気もさしてくる永富だが、そういう人間ばかりではないようだ。迷彩服の千鳥をこれ以上刺激することはない。
「そうですなあ。いよいよ始まりますか」
永富は千鳥に合わせて言った。そしてほんの少しだけ皮肉を込めて続けた。
「千鳥さんは、まだまだお若いですな」
「元気、元気。一戦まじえますよ。永富さんだって、まだお若い。鉄砲かついで行きましょう」
かなり本気になって千鳥が言った。
「いや、もうそんな元気はありません。棺桶に片足突っ込んでいますから」
永富は実感を込めていった。
「その前の、最期のご奉公です。どうせ死ぬんなら無駄死にしないで、お国のために役立ちましょう」
千鳥の言葉に、もはや打つ手はない、返す言葉はなかったように永富は感じた。永富はわずかに笑みを浮かべ、目を閉じた。もうどうでもいいやと思ったら、意識が遠のいた。考えるのを止めるとボケが早く進むのかもしれない。
それからどのくらい日にちが経ったのかもよく分からない。視力も聴力も落ちていた永富は、上はTシャツ、下はステテコ姿で坐椅子に身体をあずけて、団扇片手にテレビ画面を見ていた。少しの晩酌だが、目がとろんとした半睡状態だった。
テレビ画面には爆撃だか、砲撃だか知らないが崩れたビルが映ったり、錆びた戦車が映ったりしていた。遠くからゴーン、ゴーンと砲撃の音らしいものが聞こえてきた。
「○×○×地方の、昨日の状況です」
○×○×地方なんて言ったって、遠いところの話だ――

なんて思いながら永富は見ていた。目もとろんとしているが、頭の中も似たような状態だった。
　それでも違和感があった。〇×〇×地方？　何となく日本の地名に似ているな。テレビに司令官が出てきて喋っている。日本人のようだが、と永富は眸を凝らして見たが、焦点が合わないのではっきりしない。司令官は何か命令しているような口ぶりだ。字幕が出ていないのに、話している内容が永富にも分かる。永富は、変だとは思ったが、そのままテレビを見ていた。部屋のドアが叩かれた。
　現実に戻ったというか、夢の中でのことかよく分からなかったが、傷む足をかばいながら立って行き、ドアを開けた。右手をこめかみあたりにあてて敬礼している千鳥が立っていた。上下迷彩柄の服を着ていた。
「永富さん。地下壕に退避」
「始まったのか」
「ついに始まりました」
　いつもの会話だなと思いながら、永富はステテコ姿のまま、かかとの潰れたスニーカーを履いて外に出た。千鳥の後をよたよたと付いて行った。千鳥が夜と言わず、昼と言わずに永富の部屋のドアをたたいた。迷彩服の千鳥に付き合っているうちに、永富もだんだんその気になってきた。
「退避」
　先を行く千鳥、が言うと後から付く富永が、
「死にたくない」と声を掛ける。
「退避」
「死にたくない」
「お国のために」
「死にたくない」
「永富さん。死ね、と言うんですよ。ではもう一度」
「お国のために」
「死ね」
「お国のために」
「殺したくない」
「永富さん。殺せ、と言うんですよ。ではもう一度」
「お国のために」
「殺せ」
「そうそう、その調子」
　千鳥から褒められたが、永富はすぐに元に戻ってしまった。意識の底にあるものは容易に変化しない。こんなところはしなやかだ。
「お国のために」
「死にたくない」
「お国のために」
「殺したくない」
「ボケ爺」
　千鳥が呟いた。
「死にたくない――。え、なにか言いました」
　永富は言い、聞いた。
「なんでもない。はい、お国のために」
　千鳥が答えた。
「殺したくない」
　永富が言った。
　肘をまげて前後に振り、走ってるつもりの迷彩服の千鳥が言う。千鳥の後にくっついて歩くステテコ姿の永富が調子を合わせて付いて行った。
　いつの間にか、走る二人の目に映る風景が、何ヶ月か前にテレビに出ていたウクライナの風景のようになっていたのは気のせいだろうか。